

ぶらっと山歩（さんぽ）

鮮緑の比良山地「堂満岳・1057M」へ

文：H.Y（会長）

撮 影：T.W（布引）

年間を通じ、山々が一番華やいだ耀きを見せるのは、ゴールデンウィークへ入る 1 週間程前から 1 ヶ月程の期間である。鮮やかな新緑や、陽光を待ちわびていて一斉に咲き出した自然の花々の愛らしさに触れると、熟年世代でなくとも何故か心の高ぶりを感じることであろう。純白の雪を被った山々には青春のエネルギーを思い起こさせてくれる魅力が有り、冬仕度に入る前の紅葉に染まった山々には、若き日の郷愁を誘ってくれる何とも言えぬ魅力が有る。もしもどなたかに・・・何で山登るねん？・・・と問われたら・・・そこに（こんな心の高ぶりを呼び起してくれる）山があるから・・・とマロリーさんとは又、違った心の思いを答えるだろう。



堂満東稜手前で出逢った懐かしい 3 兄弟の大木

さて、4 月末には某バス会社の登山ツアーで大山展望の山「三平山」の山案内へ。5 月早々はヒヨコの単独例会である「ふるさと兵庫 100 山・淡路先山」の案内と、多忙な 1 週間を過ご

した。その 1 週間後には宍粟の名山「植松山」の案内、そしてすぐに水道探訪登山「大船山」の案内が控えていたが、今年は咲き年と思われた「比良・堂満岳」のシャクナゲに想いを馳せ、その合間の 5 月 11 日（木）、車を走らせた。今回の山歩は単独行ではなく、4～5 日前に逢った渡田氏にこの話をしたところ、ご一緒させてほしい！とのことで意気投合。勤め人の彼は、即、休暇届を提出したという次第であった。



堂満東稜への途中にあるノタノホリ（沼田の池）

イン谷口出合より正面谷方面へ少し登った場所に車を止め、歩き出した。平日と言うのに数台の車が出合小屋跡地付近に駐車していた。お目当てはやはり「シャクナゲ」であろう。正面谷から青ガレをつめて金糞峠へ出、東し新道から堂満山頂を目指す登山者もいれば、私達が歩く、別荘地からノタノホリへ出て堂満東稜



つぼみを蓄えて咲き出したシャクナゲ

道をつめて山頂へ至るコースを歩く登山者もいるだろう。何れにしても標高が 1057 メートル有り、しかも槍ヶ岳並みの秀麗な形をした此の山は結構登り応えのある山である。

ほとんど空き家だろうと思われる別荘（個人ロッジ）を眺めながら登山道へと入る。五月晴れに加え、リラックス効果抜群の山の空気が一気に私達を包んでくれた。6 月にはモリアオガエルの産卵が見られるノタノホリを過ぎ、谷道を詰めていくと堂満東稜尾根である。適当な大岩に腰を下ろし、コーヒータイムを楽しむ。日頃は粉末の何とも味気ない粉末のコーヒーも、山では神戸の老舗・にしむらコーヒーに引けを取らない美味さに感じる・・・のは私だけ？・・・渡田氏は如何なものだったろうか？



そっと咲いていたコイワカガミが愛らしい！

尾根筋へ出ると展望が一気に開ける。右手には大きく腕を延ばした様な釈迦岳（1060M）。大津ワングル道を攀じり、釈迦岳に立つコースが頭を過る。左手へ目を移せば、烏谷山から比良岳、そして打見山、蓬萊山（1174M）と続く南比良の山々の稜線が目を楽しませてくれる。



標高 840 メートル付近の鞍部に咲くシャクナゲ

ここからは少しずつ勾配が増し、ひたすら登るのであるが、2 人だけののんびり旅・・・である。ジグザグの登山道を景色を満喫しながらゆっくりと登る。標高 800 メートル付近を過ぎたあたりからとシャクナゲが顔を見せ出した。



清楚な色合い・比良のシャクナゲ（石楠花）

少しゆったりした台地状の場所で写真タイムに入る。今年が咲き年と思っていたが、この辺りはつぼみを持っている木が少なく、加えて咲き頃・見頃が少し早かったようである。それでもここから標高差 200 メートルを登りきった山頂の咲き加減に期待をかけて、最後の急登を目指した。



山頂に立つ渡田氏

山頂には男性 1 名と、京都弁でしゃべっていた女性 3 名の先客が昼食を取っていた。山頂は蕾を付けた木々は多かったものの、やはり咲き頃はもう 10 日程先だろうと思われた。我々も陽光に輝く琵琶湖を眺めながらの昼食タイムとした。

食事をとりながら、目の前のシャクナゲを見て
いると本当に心が和む。比良に感謝！山に感謝
である。



清楚な色合い・比良のシャクナゲ（石楠花）

女性達が食事を済ませ、ごそごそし出したので
東レ新道への下りでモタモタされると困るの
で、我々も素早く片付け、先に下ることにした。
南比良から続いている縦走コースの出合まで
は、まさに比良のシャクナゲ道である。こんな
花道を歩いていると、眼も鼻も凍える厳寒の堂
満岳を、誰が想像できるであろうか？・・・



斜面一面に咲いていたイワウチワ



東レ新道に出ると、道は平坦になり、北斜面に
は可憐な花をつけたイワウチワが、所狭しと咲
いていた。ここではコイワカガミも一歩ゆずっ

て咲いているような感があった。

金糞峠に出た所で、4～5 名の中年登山者に出
逢ったが、別段話もせず下りを急いだ・・・



大山口の道標

楽しみにしていた比良の温泉「ひらとぴあ」
には、2時半過ぎに到着。入浴客の少ない温泉
をゆっくりと楽しみ、渋滞の無い名神を快調に
走って神戸に着いた。

追記

井上靖の処女詩集「北国」の中にある
「比良のシャクナゲ」という作品の一部です。



～ それからおそらく十年になるだろうが、
私はいまだに比良のシャクナゲを知らない。忘
れていたわけではない。年々歳々、その高い峰
の白い花を睨に描く機会は私に多くなってい
る。ただあの比良の峰の頂き、香り高い花の
群落のもとで、星に顔を向けて眠る己が睡りを
想うと、その時の自分の姿の持つ、幸とか不幸
とかに無縁な、ひたすらなる悲しみのようなも
のに触れると、なぜか、下界のいかなる絶望も、
いかなる孤独も、なお猥雑なくだらぬものに思
えてくるのであった。～

合掌